

# 報告書

甲南大学経営学部 西村順二研究室 2年ゼミ生

## 学校部活動に代わる地域クラブ活動「かこ☆くら」の課題と改善策に関する考察

### 1. はじめに

近年、少子化の進行や教員不足、教員の業務負担増加を背景に、学校部活動の継続が全国的に困難となっている。加古川市においても同様の課題を抱えており、令和9年8月をもって学校部活動が終了予定となっている。

このような状況を受け、部活動に代わる新たな仕組みとして導入されたのが、地域クラブ活動である「かこ☆くら（加古川クラブ）」である。本報告書では、かこ☆くらの現状と課題を整理したうえで、SWOT分析を用いて導き出した改善策について考察する。

### 2. かこ☆くらの概要と導入背景

かこ☆くらは、学校部活動に代わる地域クラブ活動として位置づけられており、地域が主体となって運営される点に特徴がある。

導入の背景には、少子化による部活動人数の減少、教員不足、さらには教員の業務負担増加といった複合的な課題が存在する。これらの問題により、従来の学校単位で部活動を維持することが困難となり、地域全体で子どもたちのスポーツ・文化活動を支える仕組みとして、かこ☆くらが導入された。

### 3. かこ☆くらの課題

かこ☆くらの運営においては、いくつかの課題が明らかとなっている。特に大きな課題は、生徒のニーズと、実際に提供できる活動内容との間ズレが生じている点である。その要因としては、活動内容の選択肢の限界、移動距離や活動場所の問題、費用負担、指導者や受け皿となる人材の確保といった点が挙げられる。これらの課題が、かこ☆くらの参加率や継続性に影響を与えていると考えられる。

#### 4. SWOT分析による現状整理

これらの課題を整理するため、本研究ではSWOT分析を用いた。

分析の結果、強みとしては「地域密着型であること」や「学校部活動では実現できなかった新規性の高い活動を柔軟に設計できる点」が挙げられた。一方、弱みとしては「運営に必要な人材や経費の不足」が明らかとなった。

また、機会としては「地域資源の活用」や「大学生ボランティアの参加可能性」、脅威としては「運営の継続性」や「安全管理体制の確保」などが挙げられた。

	プラス要因	マイナス要因
内部環境	<p><b>強み</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○活動の頻度やレベルの多様性 初心者から経験者まで、多様な参加者に対応可能</li> <li>○地域密着 地域の人や施設と関わりながら活動ができ、多世代交流が生まれやすい</li> </ul>	<p><b>弱み</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○経費問題 備品の管理や購入のコストなど</li> <li>○年齢差・性別・経験の差 多様な人が参加することで、活動レベルに差が出やすい</li> <li>○場所問題 移設の確保が難しい</li> </ul>
外部環境	<p><b>機会</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ボランティアの参加機会の増加</li> <li>○新規性の高いクラブを作ることができる</li> <li>○活動の幅が広がることによる楽しさの向上</li> </ul>	<p><b>脅威</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○楽しみたい人と本気でやりたい人の価値観の混在 満足度の低下や摩擦が起こる可能性がある</li> <li>○遠方への移動による安全性のリスク</li> <li>○保護者の負担増加（送迎・費用面）</li> </ul>

#### 5. 改善策 A 案：新規性の高いクラブの創設

SWOT分析の結果、かこ☆くらの強みとして、学校部活動では実現できなかった多様な活動を、地域クラブとして柔軟に設計できる点が明らかとなった。また、加古川市には自然環境や公共施設といった地域資源が豊富に存在するという機会がある。

そこで、本報告書では、これらの強みと機会を掛け合わせたSO戦略として、加古川らしさを活かした新規性の高いクラブを創設するA案を提案する。

A案の目的は、学校部活動では提供が難しかった体験機会を補完し、子どもたちの活動の選択肢を広げることである。具体例として、加古川や加古川市立漕艇センターといった地域資源を活用したカヌークラブを想定した。競技力向上を目的とするのではなく、「まず体験すること」を重視した地域クラブとして位置づけ、初心者でも参加しやすい環境を整える。

さらに、地域の自然や施設を活用した活動を通して、子どもたちが自らの暮らす地域への理解や愛着を深めることも期待できる。以上より、A案は、子どもにとって魅力的な体験機会の提供と、地域資源の有効活用を同時に実現できる改善策であるといえる。

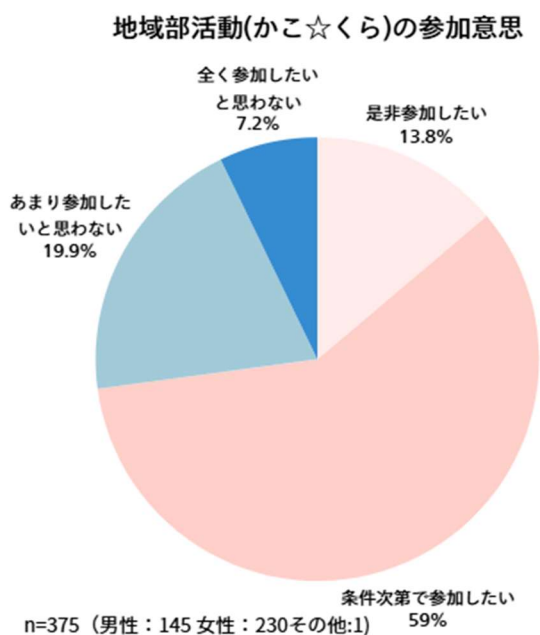
また、安全対策についてAED、救急救命、救急胴衣の研修を設けることで、安全性を高め、保護者の安心を目指す。

## 6. 改善策 B 案：大学生ボランティアを活用した低コスト運営

SWOT 分析の結果、かこ☆くらの弱みとして「運営に必要な人材および経費の不足」が明らかとなった。一方で、機会として、地域活動への参加意欲を持つ大学生ボランティアの存在が挙げられる。そこで本報告書では、これらの弱みと機会を組み合わせた WO 戦略として、大学生ボランティアを活用した低コストかつ持続可能な運営モデルを B 案として提案する。

B 案では、大学生・大学院生を「サポートコーチ」として位置づけ、子どもの見守りや初心者への基礎的な指導、メインコーチの補助を担ってもらう。大学生は専門的な指導者ではないため、AED などの事前研修を義務づけ、役割や責任範囲を明確にすることで、安心して活動に参加できる体制を整える。また、活動全体の最終的な責任はメインコーチが負うことで、大学生の安心が得られる。

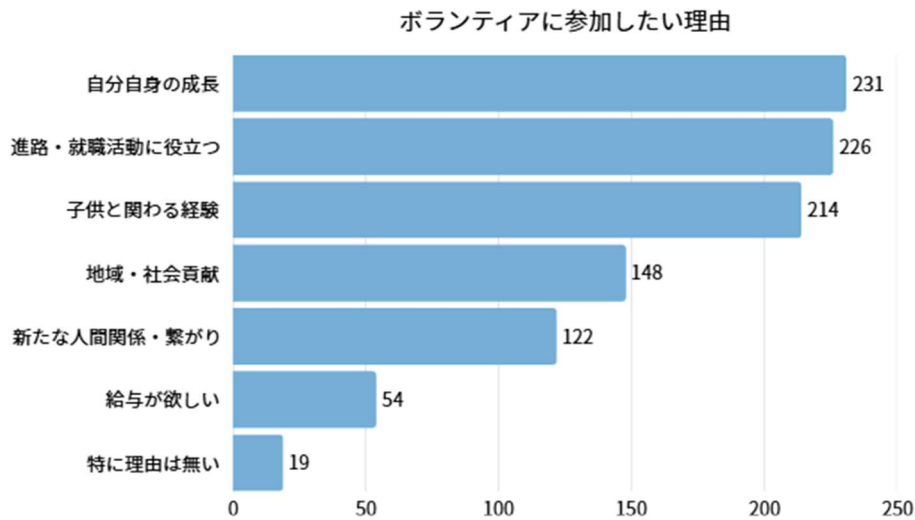
### 資料 1



大学生 375 名に行ったアンケート調査の結果から、かこ☆くらの参加意欲は 7 割以上である。

また、大学生の多くは金銭的報酬よりも、「自分自身の成長につながる」「将来に役立つ」「子どもと関わる経験を積みたい」といった内発的動機づけによって高い関与を示していることが明らかとなった。

## 資料 2

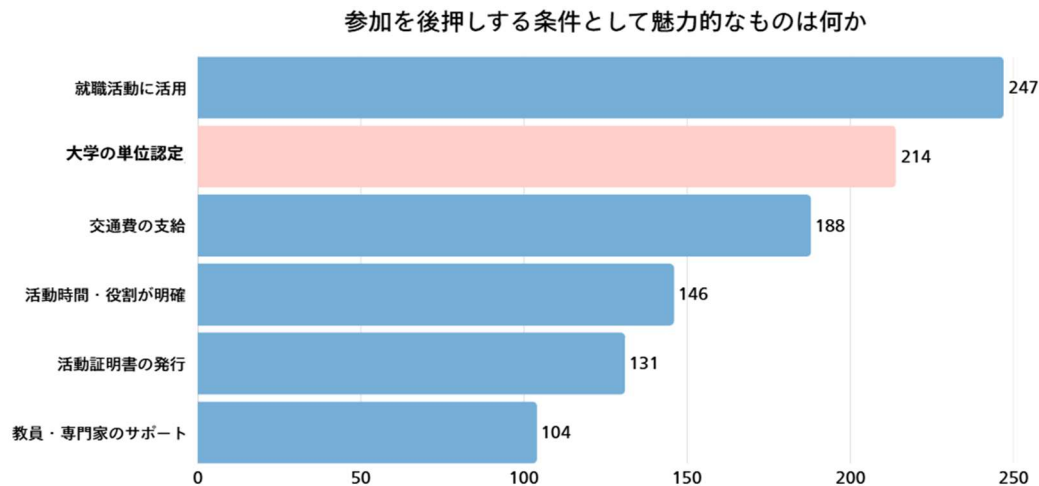


この傾向は、自己決定理論における「自律性」「有能性」「関係性」という三つの基礎的心理欲求と一致している。

一方で、時間的制約や責任への不安といった要因が、関与を実際の行動へ移す際の障壁となっている。大学生 245 名に行ったアンケートでは、ボランティアの単位の有無による参加意思の回答変化を見た。本調査は同一の大学生に対して「単位あり／なし」の 2 条件で参加意思を尋ねたため、対応のある 2 値データの比較に適したマクネマー検定を用いた。その結果から統計的に有意であることが証明された ( $p <$ )。そこで B 案では、事前研修による責任の明確化に加え、シフト制の導入や単位認定といった制度的支援を組み合わせることで、大学生の不安を軽減し、参加を行動へとつなげる仕組みを構築する。

以上より、B 案はかこ☆くらと大学生双方にとって利点の大きい win-win な関係を構築する改善策であり、長期的かつ持続可能な地域クラブ運営モデルとして有効であるといえる。

## 資料 3



#### 資料4

	参加したい	参加したくない
単位あり	239	9
単位無し	106	142

資料4の表は資料3（大学の単位制度）のグラフの詳細である。

#### 7. おわりに

本報告書では、かこ☆くらの現状と課題を整理し、SWOT分析を通じて2つの改善策を提案した。

地域資源を活かした魅力的なクラブの創設と、大学生ボランティアを活用した持続可能な運営体制を組み合わせることで、かこ☆くらは「子どもにとって魅力的で、地域にとって持続可能な地域クラブ活動」として発展していくことが期待される。

今後は、提案した施策の実現可能性や運営方法について、さらなる検討が求められる。今後の課題は以下の5点に集約され则认为る。

- 人手不足の可能性
- 営利団体との兼ね合いが困難
- 個性の尊重により団体としてのまとまりが弱くなる
- かこ☆くら全体の運営の負担が増える
- リスクヘッジ 安全対策

#### 参考文献

- ・【PJ 配布用】かこ★くら説明資料（甲南大学）.pdf p3
- ・ MINERVA はじめて学ぶ教職⑤「教育心理学」監修吉田武男編集 濱口佳和
- ・ 佐藤清湖、森田誠子、中野久美子、大森純子（2020）「“地域への愛着”に関連する地域活動の文献検討」 p7
- ・ 消費者行動論・行動経済学・心理学の講義
- ・ 瓜生原菓子（2019）「研究ノート 高関与型向社会行動の変容に関する文献的考察」『同志社商学』第71巻第1号、pp.197-222